

2024年度 埼玉医科大学短期大学  
学校推薦型選抜 B日程  
小 論 文 (看護学科)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は外科医として常に、「手術で病気を治し、患者さんの元の元気な生活を取り戻す」ことを信条にやってきました。それは両親、とくに母にいつも言われてきた「人の役に立ちなさい」という教えが、私のなかで生き続けているということでもあります。

高校生のとき、心臓病で苦しむ父の姿を見て医師を志した私ですが、じつはまだ幼い頃、「医者になれ」と祖父に言われて育ちました。

三浪の末に医学部に合格したとき、父は本当に喜んでくれ、退職金を前借して入学金を工面してくれました。その父は66歳のとき、心臓弁膜症の三度目の手術で帰らぬ人となり、私は大きな喪失感のなかで、外科医としての覚悟を誓ったものです。

母は、私が母のことを気遣うと、

「家のことよりも、おまえは患者さんのことを考えていなさい」

と、いつも同じ言葉が戻ってきました。

外科医として、世のため人のために生きる道を選んだことは、家族の生きざまからの感化もおおいにあったと私は思っています。

(中略)

私は1955年10月、埼玉県蓮田町に生まれました。現在の蓮田市です。

父は甲子男、母は与志子で、ふたりは戦後に見合い結婚し、母の実家である天野の姓を継ぐことになりました。天野家の家業は地元蓮田でLPガスなどを扱う燃料商でしたが、ふたりが結婚したとき、父はまだ勤め人で、当時の国鉄に勤めていました。

家では寡黙な父でしたが、本を読むのが好きで、雑誌も読むし、全集ものなどは東京の神田神保町まで行って古本を見つけ出してくるような教養人でした。

その父が亡くなってしばらくした頃、私は父の遺したものを整理しているとき、一冊の使い込んだ革の手帳を見つけたのです。パラパラめくっていくと、手帳の最後のページにある詩が書き写されていたのです。

《青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ》

《年を重ねただけで人は老いない。理想を失うときに初めて老いがくる》

サミュエル・ウルマンの「青春」という詩の一節（岡田義夫訳）でした。

父は手帳のそのページを何度も見返していたのでしよう。皺だらけになっていました。ウルマンはドイツ生まれのユダヤ系アメリカ人で、「青春」はウルマンが70代で書いた作品だったそうです。それにしても父はなぜこの詩に惹かれていたのでしよう。父の知らない一面を見つけたような思いで、その後の私もウルマンの詩を眺めるようになりました。

(天野篤『天職』プレジデント社より 一部改変)

問1 筆者が医師を目指すに至った経緯を100字以上150字以内にまとめなさい。

問2 文中に紹介されている「青春」という詩の一節について、筆者の父はなぜこの詩に惹かれたのか。あなたの考えを300字以内で述べなさい。